vol.01
2022.10.1

家庭科教育研究所 ニュース

Home Economics Education Research Lab.

目次

刊行にあたって …… p.1
お知らせ …… p.2
ひろば …… p.2 - 3
会員からのひとこと …… p.3 - 4
編集後記 …… p.4 - 5

和洋女子大学総合研究機構のもとに家庭科教育研究所が発足して 6 カ月が経過しました。この間、和洋の卒業生や在学生、小中高等学校家庭科の先生方、学識経験者、研究者、研究所や企業にお勤めの方等様々な方々にご入会いただきました。

これから本格始動です。私どもは、家庭科教育に関するさまざまな研究課題に取り組む一方で、勉強会の主催、会員との交流、授業研究等を通じて、家庭科教育を多方面から支え、育てる場として成長していきたいと思います。

この家庭科教育研究所ニュースは、その成果の報告、イベント・講座などのお知らせ、会員の方から発信された情報などをお届けすることを目的に、定期的に発行してまいります。こうして会員のみなさまに配信するとともに、公開状態で HP にも掲載してまいります。入会は随時受付けています。家庭科教育研究所 HP「入会のご案内」からお手続きください。
https://www.wayo.ac.jp/visitors_company/family_section

本誌の構成は目次に示した通りです。「お知らせ」には、研究所の設立記念シンポジウムと研究所主催第 1 回勉強会の予告を掲載しました。これからも、できるだけ広く情報をお伝えできるようにしてまいります。

「ひろば」では、現在までに入会された方々の情報を整理してお知らせしています。これから、どのような人たちと家庭科教育研究所という拠点を介して繋がっていくのか、みなさまにイメージをもっていただきたいと考えました。この「ひろば」が、研究所の研究成果を発表する場、会員の活動や日ごろ考えていることを自由に発表する場として広がっていくことを期待しています。

そして「会員からのひとこと」第 1 回目は、本研究所のスタッフを紹介させていただきました。この 5 名の協力・協働で研究所の運営にあたってまいります。どうぞよろしくお願いします。
「会員からのひとこと」に寄せていただく情報をお待ちしています。
事務局宛 kateika@wayo.ac.jp にお寄せください。

お知らせ

１つ目は家庭科教育研究所設立記念シンポジウムのご案内です。
2022 年 11 月 19 日（土）13 時より、研究所設立記念シンポジウムを行います。
家庭科と関連深い領域で社会的活動を展開しておられる、袖井孝子氏（一般社団法人コミュニティ・ネットワーク協会会長）、三神彩子氏（東京ガス株式会社、都市生活研究所所長）、末吉里花氏（一般社団法人　エシカル協会代表理事、日本ユネスコ国内委員会広報大使）をお迎えして、それぞれのお立場からみた家庭科の意義、家庭科教育に期待することについてご講演いただき、その後、パネルディスカッションを行います。詳細は添付ファイル「設立記念シンポジウム」をご覧ください。

オンライン併用のハイブリッドで行いますが、会場は感染防止対策に十分なスペースを確保しておりますので、できるだけたくさんの方に会場にお運びいただけると嬉しいです。終了後には交流会も予定しております。多くのみなさんのご参加をお持ちしています。

２つ目は、これから定期的に行っていく研究所主催の勉強会のお知らせです。参加は会員に限ります。第１回勉強会は、2022 年 10 月 22 日（土）16 時からオンラインで開催します。添付ファイル「勉強会のお知らせ」をご覧ください。

当日参加が難しい会員の方には録画配信も行います。

ひろば

会員の皆さまのご紹介

特別研究員　佐藤宏子

2022 年 9 月 28 日までに 93 名の皆さまが家庭科教育研究所の会員に入会してくださいました。初回の「ひろば」では、本研究所に入会してくださった会員の皆さまを紹介させていただきます。

１．会員種別

会員 93 名のうち、正会員が 85 名、学生会員が 8 名です。

２．職業

会員 93 名のうち家庭科教員および家庭科教員経験者が 48 名で過半数を占めています。有職者のうち高校教諭（19）と中学校教諭（12）が最も多く、次いで小学校教諭（７）、養護学校・特別支援学校等教諭（５）、中・高教諭（３）、元家庭科教諭（２）の順となっています。また、大学教員および大学名誉教授が 24 名、研究所研究員他が 8 名です。

３．　年齢

会員は、20 代（23)、30 代（14)、40 代（21)、50 代（14)、60 代（13)、70 代以上（７)、不明（１）と幅広い年齢層から構成されています。

４．専門分野

会員の専門分野は家庭科教育をはじめとして、家政学原論、生活経営学・家庭経営学、家族関係学、消費者教育学、消費者行動、マーケティング、栄養学、食物学、小児栄養、酪農科学、被服学、住居学、児童学、児童文化学、カリキュラム論、家族社会学、老年学、心理学、日本近代法制史、社会福祉学、社会政策、比較教育学、建築情報、人間行動など多分野にわたっています。

５．居住地域

会員の居住地域は、東京都（23)、千葉県（31)、神奈川県（11)、埼玉県（６)、茨城県（３）と関東地域が 74 名で、約 8 割を占めています。この他に、愛知県（１)、静岡県（２)、山梨県（１)、富山県（１）の中部地域が 5 名、京都府（４)、滋賀県（１)、兵庫県（３)、広島県（３）の関西中国地域が 11 名、佐賀県（１)、大分県（１)、鹿児島県（１）の九州地域が 3 名となっています。

多くの皆さまに会員になっていただき、ありがとうございました。これから皆さまとご一緒に活動していくことを楽しみにしております。研究所から、活発な発信をしていきたいと思います。

会員からのひとこと

《ここには、会員のみなさまに寄せていただいた「ひとこと」を掲載していきますが、初回は研究所のスタッフからのひとことです。》

佐藤宏子　SATO Hiroko

特別研究員の佐藤宏子です。専門分野は家族関係学、家族社会学、老年社会学です。家庭科教育研究所では、研究所の切り盛り、情報発信・広報、和洋家庭科アーカイブの整備等を行っています。会員の皆様に喜んでいただける家庭科の拠点を創りたいと思います。

工藤由貴子　KUDO Yukiko

特別研究員の工藤です。家政学原論、生活経営学、家庭科教育を専門にしています。家庭科教育研究所では、家庭科研究、勉強会の企画、News の編集を中心に活動していきます。これからみなさんと創る新しいネットワーキングに期待を膨らませています。

久保桂子　KUBO Keiko

研究員の久保桂子です。和洋女子大学家政学部服飾造形学科特任教授です。
生活経営学、家族関係学、家庭科教育を専門にしています。
研究所では、皆様と共に家庭科の教材開発や授業研究などに取り組んでいきたいと思っています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

大石恭子　OISHI Kyoko

研究員の大石恭子です。調理学を専門としています。皆さんとの情報交換を通じて、家庭科の食分野の魅力的な学習内容、効果的な教授法を模索していきたいと考えています。アイデアを募ります！どうぞよろしくお願いいたします。

柴田優子　SHIBATA Yuko

研究員の柴田優子です。専門領域は被服構成学です。家庭科における被服領域のこれからの在り方、そして、領域を越え、求められる家庭科の授業について、私自身も共に学ぶ場になることを願っています。これから、どうぞ宜しくお願いいたします。

編集後記

家庭科教育研究所レター第１号をお届けすることができました。これから会員間の対話の場として、また、研究所の活動成果を発信する場として、定期的な発行を目指していきます。どうぞよろしくお願いします。

研究所の立ち上げをお知らせすると、今後の活動に期待するという嬉しい声を届けていただきました。予想を超えるたくさんの言葉を頂戴しました。今、時代の転換期にあって、地球や人間社会のこれからを模索する時に、人間の存在の原点である生活の営みに立ち返り、そこから着実に歩みを進めてみたいという気運が高まっていることを感じました。

Empowerment：自らの資源や能力を開発し生活の主体者となる
Well-being：健康、幸福、福祉のすべてを包む生活の最適性を求めていく
Advocacy：生活者の価値の実現をみんなの共通課題としていく

（IFHE Position Statement 2008）

という理念と方法を共有する、家政学の教育的実践としての家庭科は、世界各国それぞれの歴史・文化的背景のもとでユニークな発展をしています。学校教育の枠組みに留まることなく、より広い展望のもとで社会活動の中に位置づき、個人・家族・コミュニティの様々な課題を乗り越える教育として力を発揮している国も多くあります。

日本は、小中高等学校のカリキュラムに必修の教科として位置づいているという、世界の中でも注目される国です。青年期までの、人間としての発達が著しいライフステージにおいて、すべての子どもたちに生活を総合的に探究する教育を提供しているという日本の強み、この素晴らしい家庭科をなお一層充実させていくことは私たち共通の課題です。

一方で、日本では高等学校卒業後のライフステージにおいて、あるいは社会の中で、家庭科的実践が少ないという特徴もあります。先の見通しにくい時代に主体性をもって、押し寄せる技術革新の波にもおぼれることなく生きていく人生 100 年時代。その長い旅路のお供には、ライフステージの折々に自分の生活の総点検をし、足りないものを開発し、周りの環境との再調整を行いながら生涯にわたる生きる力を充実させていく「人生の家庭科」が必携ではないでしょうか。
家庭科教育を、人生の一時期のものだけに囲い込まずより広い実践の場へと広げていく、家庭科のリ・ブランディングも重要な課題として浮かび上がります。

そして私たちは今、“changer を育てる！”という教育の世界的潮流の中にあります。地球の持続可能性の危機にあって、人と環境との新しい関係性をつくる変革の教育が求められています。日本の子どもたちが changer として世界に羽ばたくときに、自分のライフスタイルを変え、そこからまわりを変え、社会を変えていくという家庭科の方法論、知識やスキル、小中高等学校で身につけた家庭科が強い味方になってくれることは間違いありません。

家庭科がそのような本来の力を発揮するためには、多様な生活の現実、家庭科教育の現場、家庭科の研究が繋がり、相互に課題を共有しつつ対話し学び合う循環がどうしても必要です。
この研究所の活動が、そんな新しい循環をつくり出す 1 つのキーとなることを願っています。

Let’s make a new story together!

長い編集後記になってしまいました。
みなさまお元気でお過ごしください。また次号で

（編集　工藤由貴子）